

NJ 素流協 News

令和 7 年 10 月 10 日

第 249 号

令和 7 年 10 月 10 日 発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園 1 丁目 3-6 (農林会館 5 階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <https://www.soryukyo.or.jp>

鈴木理事長
コラム 特別編

ブチ切れた川上と川中と結ぶ SCM の復活に向けて ―川上と川中をつなぐ当組合の最近の取り組み―

外材丸太・製品輸入時代は、川上 (林業経営体、素材生産業者)、川中 (木材加工業者) の関係は柱角林業用等一部を除き全く無くなり、関係はブチ切れし、サプライチェーンマネジメント (SCM) は機能不全状態となった。

今、国産材時代を迎えて、川上・川中の SCM を再構築することが、当組合の役割である。設立以来取り組んできたが、最近の取組みを紹介したい。

設立当初は、川中の合板工場向けが中心であったが、現在は、合板・集成材、製材、製紙・バイオマス・燐製等のチップ材料、業務用薪等多様な供給先と、川上の素材生産業者とのマッチングに努めている。

毎月、素材生産業者の組合員には、多様な出荷先への納入希望アンケートをとり、希望する納入先へのマッチングに最大限取り組んでいる。こ

うした中、最近の工夫点は次の通り。

●納入希望アンケートに参考情報を載せる

【参考情報の例】

・スギの〇〇工場、△△工場は原木不足のため、制限なく納入可
・合板は減産傾向が強まり、〇〇、△△は納入制限あり、□□は納入可能な工場に案内します。担当までご連絡を
・製材用スギ中目材不足 (特に 3 m 材) の引き合いが強い (小径木も不足) 詳しくは担当までご連絡を

●アンケートの数量記入欄に、2 m、4 m、材種毎に「不足」の記載

●工場毎の納入カレンダーに、「不足している場合は追加納入可能」と表記

記

このように、常に組合員に情報を

伝達する仕組みをとっている。

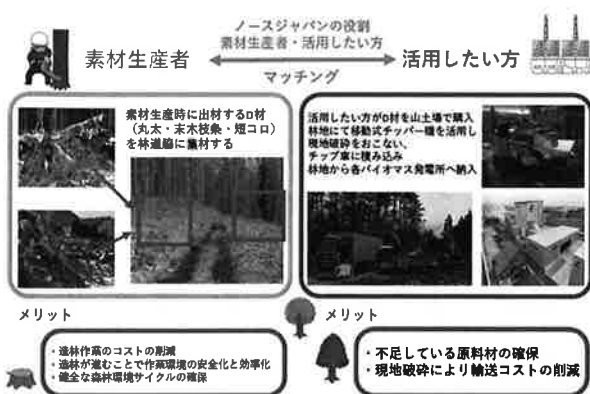
一方、納入先工場からは、欲しいけど入手が困難になってきた樹材種、急に営業で必要となってきた樹材種、予定していた丸太納入が遅れて、明日挽く丸太が無い等の要望をいただき、組合員さんにその情報を即日連絡して希望に添えることもしている。

特に、外材代替となる合板用 7 尺、8 尺、9 尺、10 尺丸太、夏場出材されない未被害地のアカマツ丸太、スギ、カラマツ杭材 (8 cm ~ 14 cm)、スギ高齢級材、スギ 3・65 m、3 m 材等の情報の相互共有に取組んでいる。毎月発行の素流協 News にも、営業部からのお知らせとして「〇月の材種、樹種の不足状況について」の掲載を始めた。

次に、新工場、新設備増強等により、納入先工場が必要とする丸太を知りたい組合員のため、工場に依頼して、工場、丸太の見学会を実施している。

加えて、山で働く現場作業職員が、自分たちが伐倒・搬出した丸太が、

川上と川中のSCMで重要なことは、今後何ヶ月からの安定した供給
需要のマッチングであり、次の1ヶ



林地残材活用マッチングも行っています

一体どのように使われ、どんな製品
になっているのかを知りたいという
仕事へのやる気の増強につながる要
望がある組合員には、同様に、工場
に連絡して、従業員を含めた見学会
をセットしている。

他にも、トビ（ガニ）腐れが多く、
工場が受けてくれる心配な組合員
がいる場合も、工場土場で丸太を見
させてもらい、品質の相互理解マッ
チングに努めている。

一部では、川中の精密な製材機
械にはねられ、製材工場では利用

月だけでなく、この後、数ヶ月間
の発注をマッチングして、情報を
流すことにより、川上の素材生産
者が、どの山を伐るか判断材料
にできるように努めている。

原木市場なら、「今売れない。単
価が下がっている」と伝わり、
山側は減産、「今売れて、単価が高
くなる」と増産だったが、直送流
通の場合は、その前に、情報とし
て伝達することが必須の仕事であ
る。



この丸太どうかな？フォトソリューションのしくみ

NJ素流協青年部会 令和
7年度 視察研修会を開催

当組合青年部会は9月11日～13日、

トピックス

不可の丸太を使える別の川中工場
にもマッチングしている。

もう一つだけ、改正クリーンウツ
ド法施行により、今までも、伐採
届等合法性証明を全て揃えて保管
していたが、川中の求めに応じて、
情報伝達をしている。併せて、G
HG関連情報も川中の希望月から
の管理・伝達を始めている。これ
も川上と川中を結ぶマッチング業
務である。

最後に、川上、川中ともに困つ
たときに助けることが最も大切な
ことである。最近の素材生産業は、
下請けからの独立、他業種からの
参入、若い人の起業もあり、幅広
い県内外の情報提供に努めている。

当組合の理念である「ウィンウイ
ン」「ギブアンドギブ」に邁進であ
る。



大屋根リングに使用される木材の約7割が
国産材

大阪府において、令和7年度視察研
修を開催し、会員・事務局合わせて
12名が参加しました。

今回は大阪市夢洲で開催されてい
る2025年日本国際博覧会（大阪・
関西万博）において、最大の木造建
築物である「大屋根リング」や、世
界各国の木造・木質パビリオンを視
察しました。

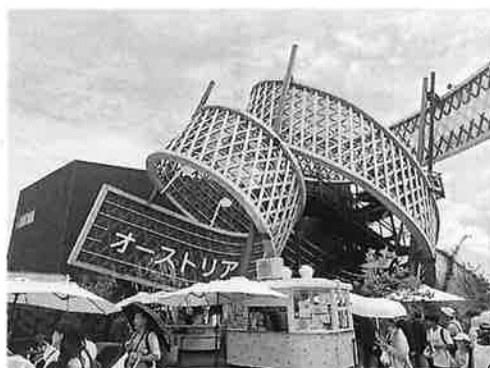
入場ゲートをくぐると、早速、会
場の目玉である「大屋根リング」が
目の前に現れ、その巨大なスケール
に圧倒されました。

大屋根リング以外にも木造・木質
を前面に出すパビリオンが多く、世
界各国で木に対する関心が高まって



青年部会の皆さん、お疲れ様でした！

閉幕が約1ヶ月後に迫り、来場者数が20万人を超える中、パビリオンへの入場も一苦労でしたが、またとない大変貴重な経験となりました。



五線譜をイメージした、オーストリアパビリオン木造構造物

いることが感じられました。

兵庫県・大阪府でN J素流協 職員研修旅行を実施！

N J素流協は、9月9～11日、職員の視察研修を実施し、大阪府及び兵庫県内の3か所の事業体を視察しました。

◎朝日ウッドテック株式会社 大阪
木材コンビナート・朝日銘木株式会社（大阪府忠岡町）

天然木床材を生産する朝日ウッドテック(株)の海堀取締役副会長、朝日銘木(株)の永見常務取締役にご案内いただき、丸太の製材から突板生産、床材ができるまでの工程を視察しました。

材の魅力を見極め引き出すというもののづくりの姿勢のもと、木目のパランスなどを考慮した細やかな点や品質管理の丁寧さを拝見しました。また、商品技術開発センターでは実際の製品も見学し、床材や壁材に触れ、その質感の良さを直接確認することができました。



工場で製造されたフロア材を見学しました！実際に触れ、歩いてみて天然木の質感の良さを実感！

◎株式会社山崎木材市場（兵庫県）

東取締役副社長、山本専務取締役、ならびに兵庫県庁農林水産部小長井様のご案内で市場の運営方法について伺った後、土場を視察しました。

関西地区で最大級の取扱量を誇る同市場は、兵庫県産材の流通拠点として位置づけられています。年間取扱量は約10万㎡にのぼり、そのうちおよそ7割がスギ、残りはヒノキやモミなどの樹種となっています。

原木は山での検知や仕分けを行うことなく市場へ持ち込まれ、選木機やグラップルを使って品質ごとに丁寧に仕分けされます。この体制によ

り県外からも多くの買い手が訪れ、販売量の約6割は県外へと流通しているそうです。

また同市場は「せり売り」を重視しており原木の選別や仕分けの丁寧さ、商品の下見のしやすさが特徴となっています。実際の土場を見学させていただき、品質ランクに応じた原木の配列や丁寧に仕分けされた積みの様子を視察しました。



品質ごとに丁寧に仕分けされた原木は極の並び位置も配慮されています

◎協同組合兵庫木材センター（兵庫県）

八木理事長、春名常務にご案内いただき、原木調達から製品製造までの取り組みについて伺いました。

同社の最大年間原木取扱量は約1

26, 500³mで、仕入れた原木のうち選木された約80, 000³mは柱や間柱などに製材され、残りは合板工場などへ販売されています。

工場見学では、高速製材機による製品製造の過程を視察しました。

また、森林全体の収益を高めることを目的に、製材過程で生じる端材も活用し、原木を無駄なく生かす仕組みについても伺いました。



視察を受け入れてくださり心より感謝申し上げます。

今回の研修で得た学びを活かし、原木流通に一層貢献できるよう取り組んでまいります。

視察を受け入れてくださった皆様
に厚く御礼申し上げます。

小池百合子都知事が、小泉進次郎農林水産大臣に直接要請書を手渡し!!

全国知事会が、新たな「国産木材の需要拡大に向けた提言」を公表

令和7年8月19日、全国知事会は、

森林資源の循環利用を進め、再造林などの森林整備を推進し、災害防止の観点から極めて重要な森林再生の取組へ繋げる必要性、民間事業においてCSRやESG投資の観点から木材利用の意識が高まっていることなどから、この機会を逃すことなく、国産木材の供給能力を速やかに高め、消費地である都市部と生産地である山間地の繋がりによる地域の活性化や国土強靱化などに貢献する国産木材の更なる需要拡大を図り、我が国が長年培ってきた「木の文化」を次世代に確実に引き継ぐため、新たな「国産木材の需要拡大に向けた提言」を公表しました。

【提言の重点事項】

①「新たな国産木材の需要創出」における民間建築物の木造化・木質化の推進及び②木材・木材製品の輸出拡大

③「公共建築物の木造化・木質化の推進」における財源の確保

④「大規模な木造建築物の設計や施工を担う人材の育成」における建築士等の育成

⑤「国産木材活用」の意義や魅力の周知・啓発」における木材の特性や木材活用のメリット・効果の発信

⑥「生産・流通体制の強化」における国産木材への転換促進及び⑦花粉症対策の推進

【令和7年度提言のポイント】

①は、JAS構造材の流通量拡大に向けた支援及びCLT等の普及、②は、相互関税の導入に伴う国産木材の輸出等の影響を迅速に調査・整理するとともに、関連事業者への支援、⑤は、木造化・木質化されたモデル的建築物の事例活用を通じて、炭素の貯蔵効果やカーボンニュートラルに貢献する木材活用のメリットや地域経済への波及効果、木材を利

用した居住環境が人に与える効果についての研究、知見の蓄積・検証を推進する支援制度を創設し、その結果の情報発信を強化することとしている。

そのほか分収造林事業の収束に伴う債務整理や森林管理への支援、森林の境界明確化と所有権移転への法制度の整備、獣害対策技術の開発についても求めています。

東京都 国産木材利用のリーダーとして期待!! 巨大市場だ!!

全国知事会HPより

<https://www.nga.gr.jp/>

国産木材の需要拡大に向けた提言 (左QR)
国産木材の需要拡大に向けた各都道府県の取組事例集 (右QR)



第8回伐採搬出・再造林 ガイドラインサミット in 秋田大会が開催

10月3日、秋田県で「第8回伐採搬出・再造林ガイドラインサミット 秋田大会」が開催され、当組合から一条参与兼経営企画管理部長ほか3名が参加しました。

サミットでは、2団体による活動報告、木材高度加工研究所 高田克彦所長による基調講演、ドローンによる除草剤散布、無人遠隔伐採機・植栽機械実証の事例紹介のほか、産学官からのパネラーによるパネルディスカッション「人口減少に寄添う森林経営」が行われました。

お知らせ

狩猟が始まります！事故 防止の徹底を

鳥獣保護管理法に定められた猟期に先駆けて、ニホンジカ等特定鳥獣の狩猟が、11月から始まります（県や地域によって異なるのでご注意ください）。

ださい。森林における事故防止の徹底をお願いします。

安全確保については、次の4点の徹底をお願いいたします。

- ① 作業者に狩猟期間を周知する。
- ② 作業現場や林道の入り口等の目立つ場所に作業中の「のぼり」や作業箇所・作業期間等を記載した看板等を設置する（狩猟以外の入山者の事故防止にも役立ちます）。
- ③ 林内の作業には、オレンジ色や黄色等の目立つ色の服装やヘルメットを着用する。
- ※ 狩猟者は、自分たちがオレンジ色や黄色のベストを着用しているの、この色には特に敏感です。また、白色は、ニホンジカのお尻の色と間違われる恐れがあるので、白色の服装やヘルメットを避ける必要があります。もちろん茶色の服装は危険！！
- ※ 蛍光性のある高視認性タイプのオレンジ色・黄色の反射板付きのベストが、作業もしやすく、効果的です。
- ④ レクリエーションやきのこ採取などの不特定の入林者にも目立つ服装

を呼びかける。

クマにも 注意！



クマによる人身被害が相次いでいます。これからの時期は、冬眠に備え、餌を求めてクマの行動圏が拡大（今年はブナ、ドングリが大凶作）するほか、林内の狩猟用などで錯誤捕獲されたクマや、捕獲鳥獣に誘引されたクマに遭遇する可能性も高まります。充分ご注意ください。

●クマと出会わないために

- ・鈴やラジオなどの音で自分の存在を知らせる
- ・クマの生態や行動をよく知る
- ・目撃、出没情報のあるところに近づかない
- ・クマの新しい痕跡（糞、爪痕など）があったら十分気を付ける

●クマに出会ってしまったら

・「おっい」等先に穏やかに声をか

け、存在を知らせる

・クマに背を向けずに、ゆっくりその場から離れる

・威嚇や、走って逃げたりしない

退職金の備えは万全ですか

～10月は林退共の

加入促進強化月間～

林業退職金共済制度（以下、林退共）は、林業で働く人々のために国が設けた退職金制度です。事業主が共済契約を結ぶことで、従業員が退職した際に退職金を支払う仕組みで、毎年10月は林退共加入促進強化月間です。

【加入資格】

専業・兼業を問わず、林業に従事する全ての労働者が対象です。

※一人親方でも、一人親方として就労する方が集まった「任意組合」を通じて加入できます。

【退職金支払いまでの流れ】

●加入

各都道府県林退共支部へ申込み。
事業主：林業退職金共済契約者証

従事者：退職金共済手帳
がもらえる。

●掛金を納める

最寄りの指定金融機関で「共済証紙」を購入。

賃金を払う都度、働いた日数に応じた「共済証紙」を、従事者の共済手帳に貼って消印。

●退職金を受け取る

共済手帳に貼り終わった共済証紙が24月以上になり、林業関係の

主な特徴

▽雇用主が変わっても、従業員の被共済者としての地位は維持され、働いた日数が通算されます。

▽事業主が支払う掛け金は、法人の場合は損金、個人の場合は必要経費として全額非課税です。

▽新たに加入した従業員について、初回公布の共済手帳の62日分の掛金が免除されます。

仕事をしなくなったとき等に、必要書類を揃えて林退共支部へ。

その他詳細は、以下のホームページ等をご参照ください。

林業退職金共済事業本部

<https://www.rintaikyo.taisyokukin.go.jp/>



令和7年度 第1回 林業講演会を開催します

近年、国産広葉樹の需要が大きくなっています。

そこで、広葉樹材の多様な生産供給について学ぶことを目的として、令和7年度の第1回林業講演会を次のとおり開催します。

【テーマ】

「国産広葉樹利用新時代に向かって」～素材生産者も意識改革！～

【日時】

11月18日（火）

13時00分～16時30分

【会場】

ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング

【講演者】

●千歳林業株式会社 経営企画部
部長 奥村 隼右氏

●信州ウッドコーディネーター
香田 るい氏

●カリモク家具株式会社 取締役
副社長 加藤 洋氏

各講演の後、講演者と鈴木理事
長との意見交換も行われます。

内容の詳細、参加申し込みにつ
きましては別途ご案内いたします。

皆様の参加をお待ちしておりま
す！

営業からのお知らせ

～樹種・材種の
不足状況について～

10月10日時点での、樹種・材種の
不足状況について以下の通りお
知らせします。

何卒ご協力をお願いいたします。

●集成材用 スギ4m材：制限な
く納入可能です。

●合板用：合板工場の減産が継続
しており、納入制限が続く（スギ・
カラマツ）。

しかし、アカマツに関しては出
材量も少なく、引き合いは強い状
況です。

●製材用：製材用の原木は不足状
況。

特に、スギ3m材、3・65m
材の引き合いが強いです。

詳しくは営業担当までご連絡く
ださい。



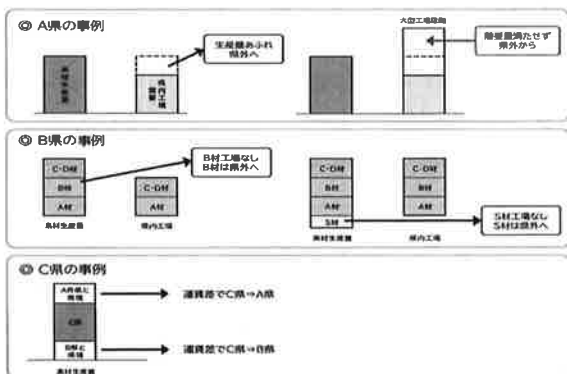
気温が下がり、虫害・青変菌の
心配が少なくなる時期ですが、
できるだけ、伐採後速やかな（フ
レッシュ状態）納入にご協力お
願いたします。

東北エリアで丸太が県を超えて広域流通する理由
— 県内丸太流通・生産完結型が理想か？無理でしょう！ —

今、国産材振興どころか県産材振興のテーマ掲載が目立つようになっている。

しかし、丸太は県を超えて出入りが激しい。理由は、以下の3枚の資料を見ていただきたい。

マクロ広域流通

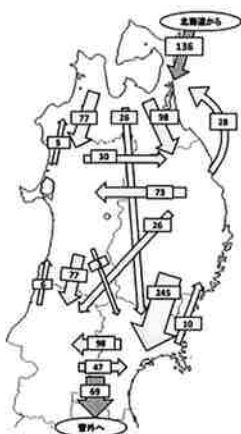


東北各県を丸太が相互流通する理由

1. 県内需要量 ≧ 県内生産量 青森県 → 他県
2. 県内需要量 ≧ 県内生産量 宮城県 ← 他県
3. 県内大型工場の材長・樹種限定 山形県 → 宮城県
4. カラマツ・アカマツの需要ギャップ 岩手県他 → 秋田県・宮城県
5. 広葉樹高い市場へ 秋田県・青森県 → 岩手県
6. スギ高年齢高い市場へ東北各県 → 秋田県
7. 国有林請負
大手一斉参加で、国有林主力地域の夏冬需要ギャップ「夏場の他県利用」
間伐と皆伐の生産性に大きな開き → 秋田県、青森県、山形県最上

一番は、県が広すぎ、県の大工場より、他県の大工場の方が
近くて山元丸太価格高い！

「隠れた理由」→ 明治時代前からの歴史？



出典「令和5年木材需給報告書」、
令和7年度東北地区国有林材供給調整
検討委員会資料より

外材丸太輸入全盛時代は、全国の団体である全木連、日集協、日合連、全市連等各種団体も、外材利用企業が絶対多数で、木材需要

拡大は言えても、国産材需要拡大は言いにくかったが、用材の自給率が50%超えると普通になった。

ここで、県産材振興ワードである。県の丸太生産量と丸太消費量が合致するのなら、何で県外から丸太を入れるのかと発言する県職員もいる。

しかし、各工場が必要で必須である丸太は、樹種、材長、径級、品質とバラバラである。これを定期的に供給できるかがキーである。

だからこそ、東北でも、東北各県を行き来するだけでなく、北海道や東日本・西日本まで含む内航船も動いているのである。

それなら、工場に「自県分の丸太だけ使え」、「余って他県へ出す丸太を使う県内工場を作れ、設備投資しろ」と言えるだろうか？

そして、素材生産業にとっても多様な立木を有効活用せざるをえないし、全て活用しないと、植林、森林管理してきた先祖・先輩に失礼に当たる。

県を超えて丸太を流通させ、人

口減少甚だしい東北の地域振興（中山間地だけでなく最近では中心都市も）に役立てることが今の最大の課題である。

東京・大阪では都府単位での自給自足は明らかに無理で、東北等の林業県から供給するしかない。ここへの県を超えた製品販売は、各県職員ともニツコニツコかな。

よって、県産材振興は「県で生産された丸太を一番有利で余すことなく使おうよ」であって、「県外へ出すな」、「県内の工場は県外の丸太を使うな」ではないのである。

それには、大前提がある。県内の樹材種の比率、品質、工場が仕入れている丸太の材長・品質・単価を徹底的に認識し、隣接している他県も同様に、徹底的に認識することである。

統計の数字だけで構想を描くことは全く役に立たない。いわゆる「絵に描いた餅」である。こうした、「地に足のついた」データを提供することがN J素流協の役割でもある。

令和7年9月分の販売実績

樹 種	合 板 ・ L V L 用			製材 ・ 集成材 ・ その他用			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
ス ギ	11,901	127.5	97.0	17,395	116.4	94.9	29,296	120.7	95.7
カラマツ	5,926	104.5	120.7	185	88.2	143.6	6,111	103.9	121.2
アカマツ	1,003	45.1	70.7	21	27.3	88.0	1,025	44.5	71.0
その他	24	318.9	13.9	128	119.8	74.3	152	132.7	44.3
合 計	18,854	109.3	100.5	17,730	115.6	95.0	36,584	112.3	97.7

樹 種	燃 料 用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
ス ギ	5,695	113.8	153.8
カラマツ	4,598	106.1	113.9
アカマツ	1,338	158.7	418.5
その他	685	119.2	105.0
合 計	12,315	114.5	141.4

樹 種	今 年 度 累 計			
	合板・LVL用 (m ³)	製材・集成材・その他用 (m ³)	計 (m ³)	燃料用 (t)
ス ギ	70,114	96,927	167,041	20,991
カラマツ	39,384	1,243	40,627	24,494
アカマツ	13,210	156	13,367	4,985
その他	53	1,059	1,113	4,123
合 計	122,762	99,385	222,147	54,593
目標達成率(%)	49.1	53.7	51.1	45.5
計 画 量	250,000	185,000	435,000	120,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和7年10月の需給動向】

- 集成材、製材工場の原木不足状況は続く。スギ4m材に加え3m材も引き合いが強い。
- 合板工場の減産は継続しており、納入制限が続く。特にスギ、カラマツの制限が強まる。

一方で、アカマツは出材も少ないことから、合板工場の引き合いは依然強い。

耳からウロコ

近隣市町村の確執

― 共同産地名 名乗れないの？ ―

平成の市町村大合併前の話である。北海道日高地方には、「バットの森」がある。有名で、野球ファンなら誰でも知っている、プロ野球選手の落合博満氏が、野球のバットはアオダモが一番だということとで設置された。当時から、野球のバットといえは、北米産のホワイトアッシュだったが、アオダモに拘った。

そのバットの加工業者が日高地方にいた。もめごととは何か？というところ、国有林は何故、我が町のアオダモの木を隣町のバット加工業者に売っているのか。うちの町のアオダモは、うちの町のものでしょ？とである。隣接しているなら逆パターンだ。である。「日高地方のアオダモバットでいいの」である。解決には、北海道庁にも依頼した。

同じケースが福島県会津地方でもあった。会津若松対喜多方である。違う町の桐の木を使うな論争である。会津桐、桐タンスで産地ブランドなのである。その後、日本の桐の団体が消滅したことに少し影響したのかもしれない。本質は、結婚祝いの桐文化の衰退が一番と思われる。

るが、当時は、秋田県雄平木材市場で桐丸太の市が開かれ、全国から買い手が来ていた記憶がある。もちろん、会津からもかな。

そして、私が直接関わったのが、北山の磨丸太である。昭和末期の磨丸太ブームの中、出向中の京都府京北町で、磨丸太の協同組合で、磨丸太の製品市場を新たに建設した。この時、京都府京都市には既に、銘木市場は全銘加盟の2団体の2か所存在していた。今までのルールで、市売を開催した時、全国の銘木業者を呼ぶことが困難で、すぐ隣にある北山中川の銘協が許さないと無理だった。そこで、東京に陳情に行き、全銘加盟を依頼したが、1つの都道府県で、3つの会員は無理と断られた。結果、役場が主体となる記念市を年2回開催して、この2回だけは、全国から自由に参加できる仕組みを作ったが、役場の職員としては、開催参加のお願いで業者を回るのは大変だった記憶がある。

今は、京北町も同じ京都市となっているが、磨丸太ブームは現在低下していると言わざるを得ない。これも、隣接する狭いエリアの軋轢である。

もし、全てのケースで、まとまって産地化すれば良かったかも...と思えてならない。当時の関係者も「しまった！」と天国で思っているかもしれないが...